

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：32614

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K22041

研究課題名(和文) 国家神道の社会事業的性格の研究 - 感染症対策事業における神社界の役割と活動 -

研究課題名(英文) Study on the characteristic of the Social Welfare of State Shinto

研究代表者

柏木 亨介 (KASHIWAGI, Kyosuke)

國學院大學・神道文化学部・助教

研究者番号：10751349

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、昭和戦前期から終戦直後にかけての国立ハンセン病療養所における神職団体の慰問活動に関する資料を収集し、いわゆる「国家神道」の社会事業の性格について分析を進めた。国立療養所大島青松園(香川県)、国立療養所菊池恵楓園(熊本県)、国立療養所邑久光明園(岡山県)、金光教教学研究所(岡山県)、および京都府立京都学・歴彩館において関連文書等を調査した。その結果、戦前の国立ハンセン病療養所の神社および神職団体の慰問活動には、1) 地元神職団体の主導、2) 療養所および地元行政(県)の主導、3) 入所者(自治会)側の主導、の3つの方向が存在することが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の社会事業に関する研究では、キリスト教団の活動がおもに分析されていたが、本研究は国家神道の社会事業に着目することによって、戦前期の宗教と社会との関係性を捉えるフレームワークの再構築に寄与するものである。

それに加えて、病に対する人々の不安心理に神道がどのような対応してきたかという本研究の問いと成果は、祭りの形式や神社行政制度ではなく、一般人の日常生活を視点に据える民俗学的視点からなされたものであり、社会事業実践のあり方として3つの方向性を明らかにするとともに、今後の政策や事業にも寄与しうる知識、情報である。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to collect archives on the comforting activities of Shinto priest organizations at national leprosy sanatoriums from the early Showa period to the immediate post-war period and to analyze the characteristic of the so-called "State Shinto" as a social welfare endeavor.

The research was conducted at the following facilities: National Sanatorium Oshima Seisho-en (Kagawa Pref.), National Sanatorium Kikuchi Keifu-en (Kumamoto Pref.), National Sanatorium Oku Komyo-en (Okayama Pref.), Konkokyo Research Institute (Okayama Pref.), and Kyoto Institute, Library and Archives (Kyoto Pref.).

As a result, it is proved that the comforting activities by Shinto priest organizations at the national leprosy sanatoriums before the war were led by three different directions: 1) local Shinto priest organizations, 2) the sanatoriums and local administrations (prefectures), and 3) the residents' associations (autonomous associations).

研究分野：民俗学・文化人類学

キーワード：国家神道 神職会 感染症 社会事業 ハンセン病

## 1. 研究開始当初の背景

近代の宗教団体による社会事業の研究は、教団理念と経営組織と活動実態の三者を押さえずつ国家との関係性にも目配りした研究が進んでいる<sup>(1)</sup>。ただし、キリスト教と仏教団体については研究成果が積み重ねられているものの、神道については研究蓄積が浅いと指摘される<sup>(2)</sup>。その理由の一つとして、当時の社会事業に対してはキリスト教団体がその宗教理念にもとづき精力的に慈善活動を展開していたが、神道は「国家ノ宗旨」であり内務省神社局が神社行政を担っていた経緯から、近代神道史のおもな研究関心は国家と神道との権力関係や法制的関係の解明に重点が置かれていた<sup>(3)</sup>。

本研究が着目するのは、近代国家形成期、神社界は「国家ノ宗旨」としてどのように社会に貢献したのか、という点である。先行研究が明らかにしているように、キリスト教が社会事業に人員と予算を注ぐのに対して、神社界ではその規模や事業内容等に関して具体的に明らかにされていない。神道が国民生活の精神面以外に、どのような場面で関与していたのか。

すなわち、本研究は国家神道のイデオロギー的側面ではなく、衣食住といった国民生活の基盤に視点を置き、人々の日常生活のなかで神道がいかなる場面において立ち現れていたのか、を問うものである。とりわけ、感染症という人の生命はもちろん社会的機能の停滞を陥れる事態に対し、神道は前近代より祇園祭などに代表される神社祭祀や疫病神送りなどの民俗行事を通して感染症に対する人々の不安心理の解消を図ってきたが、近代医学の普及と人口増大という近代特有の状況において、「国家ノ宗旨」とされた当時の神道に寄せられた新たな期待とそれへの対応について、本研究は問うものである。

- (1) 日本キリスト教社会福祉学会編『日本キリスト教社会福祉の歴史』2014年、ミネルヴァ書房、菊池正治「仏教福祉の歴史的課題：近代真宗教団の実践を通して」『社会事業史研究』46、2014年、猪飼隆明『ハンナ・リデルと回春病院』2005年、熊本出版文化会館、など。
- (2) 一番ヶ瀬康子ほか編『福祉文化論』1997年、有斐閣、など
- (3) 島蘭進『国家神道と日本人』2010年、岩波書店、阪本是丸『国家神道形成過程の研究』1994年、岩波書店、など

## 2. 研究の目的

本研究は、国家神道の社会事業のなかでも感染症対策事業への取り組みを調査する。国家神道の社会事業については、藤本頼生が内務省官僚や同省神社局と衛生局の動向をまとめ、桜井治男が地域神社に着目して微細な分析を進めている<sup>(4)</sup>。しかしながら、地域神社界の社会事業活動の実態を、医療史や民俗学の枠組みのなかに位置づけていないため、感染症に対する人々の不安心理に神道がいかに応えることができたのか、という点は明らかではない。

また、近代医療史においても、キリスト教団体と社会事業との関連については明らかにしているものの、地元神社界との関係については調査されていない<sup>(5)</sup>。つまり、各種神社団体は地域社会単位で実施されるはずの感染症対策事業に対してどのような協力を行なったのかがいまだに不明である。

そこで本研究では、感染症のなかでも古代からその存在が知られ、戦後になってようやく治療法が確立したハンセン病に焦点を絞り、この病に対して積極的な活動を展開したとみられる岡山県、香川県、熊本県、京都府の神職団体の活動実態を調査する。具体的にはこれら府県の神職会(神社庁)が保管する当時のハンセン病対策資料の収集を行うことと、所在した国立療養所の神社および祭祀の実態、の2点を調査する。そして、同時代の仏教、キリスト教団体のハンセン病に対する慈善活動も先行研究を参照し、三団体の比較研究を通して神社団体の社会事業の特徴を明らかにする。ゆえに本研究は、民俗学的研究を通して近代神道史と近代医療史の成果を架橋する役割をもち、近代医療宗教論として今後の研究に展開しうるものである。

- (4) 藤本頼生『神道と社会事業の近代史』2009年、弘文堂、桜井治男『神道の多面的価値 - 地域神社と宗教研究・福祉文化 - 』2014年、皇學館大学出版部、など。
- (5) 猪飼隆明『近代日本におけるハンセン病政策の成立と病者たち』2016年、校倉書房、廣川和花『近代日本のハンセン病問題と地域社会』2011年、大阪大学出版会、など。

### 3. 研究の方法

本研究では、国立療養所菊池恵楓園が所在する熊本県神職会、国立療養所大島青松園が所在する香川県神職会、国立療養所邑久光明園が所在する岡山県神職会および関連団体の京都求らいの会の活動に対象を絞り、同会のハンセン病関連資料の収集と目録作成を行い、その活動内容の概要をまとめる。それと並行して、上記3つの療養所において、神社祭祀など儀礼の観察および聞き書きを行い、往時の状況に関する伝承を記録する。神職会資料と療養所の伝承を関連させながら、国家神道による社会事業の実態をまとめ、適宜学会等で発表する。

### 4. 研究成果

本研究では、国立療養所大島青松園（香川県）、国立療養所菊池恵楓園（熊本県）、国立療養所邑久光明園（岡山県）、金光教教学研究所（岡山県）、京都府立京都学・歴彩館（京都府）において療養所所蔵文書、入所者自治会保管日誌、宗教団体所蔵資料を閲覧、写真撮影をし、地元神職団体の活動実態の把握を試みた。

その結果、香川県神職会による同園の慰問活動は、戦前は同神職会会長、副会長、地元支部の神職が訪問して病気平癒祈願祭を執り行っていたが、戦後は慰霊祭という名で地元支部の神職のみが訪問するかたちになっており、戦前と戦後とでは慰問活動の質的变化がみられることがわかった。また、国立療養所菊池恵楓園の資料調査では、皇太后下賜金の使途に関する通達文、社殿建築の入札書類、御神体授受の領収書などの存在から、同園の神社創建は地元神職団体の慰問活動や入所者側の要望ではなく、療養所と管轄県が主導して進められていたことが判明した。一方、国立療養所邑久光明園での資料調査では、所内神社は慰問活動をしていた講談師の手引きにより京都求らいの会を通して建立されたことが判明した。そして、京都府立京都学・歴彩館において同会に関する資料調査を行った結果、同会は京都府宗教連盟による社会事業の一環として昭和26年末に結成された団体であり、会長に八坂神社宮司高原美忠氏が就任し、京都府内の宗教系大学を中心にした求らいのボランティア学生団体とともに活動していたことがわかった。

以上から、戦前の国立ハンセン病療養所の神社および神職団体の慰問活動には、1) 地元神職団体の主導、2) 療養所および地元行政（県）の主導、3) 入所者（自治会）側の主導、の3つの方向が存在することが判明した。

以上の研究成果について、第74回神道宗教学会学術大会（2020年12月、題目「国立ハンセン病療養所に対する貞明皇后御写真下賜と奉安殿の設置」）および日本民俗学会第73回年会（2021年10月、題目「ハンセン病療養所における神職団体の活動 - 病気平癒祈願祭・慰霊祭・例祭 - 」）にて発表を行い、目下、2022年度中に実施した調査内容を加えてまとめた報告書を執筆している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 柏木亨介	4. 巻 264・265
2. 論文標題 国立ハンセン病療養所に対する貞明皇后御写真下賜と奉安殿の設置	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 神道宗教	6. 最初と最後の頁 171-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 柏木亨介
2. 発表標題 国立ハンセン病療養所に対する貞明皇后御写真下賜と奉安殿の設置
3. 学会等名 神道宗教学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 柏木亨介
2. 発表標題 ハンセン病療養所における神職団体の活動 - 病気平癒祈願祭・慰霊祭・例祭 -
3. 学会等名 日本民俗学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------